

平成30年度「若手教員等研究支援費（若手教員等支援枠）」研究成果報告書

研究課題	教師の「学び手感覚」の活性化を核とする校内研修デザイン		
氏名	渡辺貴裕	所属	教職大学院 職名 准教授
CITI Japan 研究倫理 e-ラーニングプログラムの受講 <input checked="" type="checkbox"/> ←受講済の場合はチェックをすること			
<p><b>【研究成果の概要】</b> （文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度）</p> <p>校内研修の充実のために、「ワークショップ」「リフレクション」などさまざまな発想の導入が試みられてきた。しかし、それらも、教師が子どもの学習を客観的視点から眺める立ち位置のままでは、子どもの学習を操作可能な対象として捉える枠組みから脱せられず、学習者主体の学習の実現が難しい。むしろ、ここでの問題は、教師自らの学び手としての感覚と子どもたちを対象とした授業づくりとが分離している点にあると考えられる。そこで本研究では、教師の「学び手感覚」を活性化して授業について考える検討会のあり方を、実践的な取り組みを通して探究することを目的とした。</p> <p>実践的な取り組みは次の2つに分かれる。</p> <p>1つは、教職大学院生による「対話型模擬授業検討会」の学外でのコラボ企画である。対話型模擬授業検討会は、その模擬授業において学習者役（あるいは授業者役）としてどう頭を働かせたり感じたりしたかに注目し、それをフラットな関係で対話することで、授業についての本質的な問いを浮かびあがらせていく、検討会のスタイルである。院生らが他大学や学会の企画でこれの実演を行ったり、この発想を取り入れた授業検討会を実際の学校で実施したりして、学校の校内研修での応用可能性を探った。</p> <p>もう1つは、京都府八幡市立美濃山小学校における取り組みである。同校では、事前検討会や事後検討会において学習者に「なってみる」スタイルを取り入れて、授業での演劇的手法の活用に取り組む校内研究を進めてきた。例えば、事後検討会の場合、授業で子どもたちが行っていた活動を、参観していた教師らも追体験することで、授業中の出来事を共感的に捉え、検討を行っていくというものである。この校内研究の推進に協力し、また、関係者へのインタビュー調査を行った。</p> <p>これらを通して、教師が、「教える人」としての役割からいったん離れて学習活動の体験を行うことで、「学び手感覚」の活性化を図れること、またそれが、授業の考案における創造性の発揮や、教師同士のフラットな関係性の構築に寄与することを、示すことができた。</p>			
<p><b>【研究成果発表方法】</b></p> <p>研究成果の一部を、日本教師教育学会での大会校企画の報告書『「対話型模擬授業検討会」の実演とそれをめぐって』（2019年2月）にまとめて発表した。</p>			

※発表論文名（口頭発表を含む）、氏名、学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入すること。

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。

なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。